

ポピュリズムとしての橋下府政

府民は何を評価し、なぜ支持するのか

松谷 満

桐蔭横浜大学専任講師

一 橋下府知事はポピュリストなのか

橋下府政の誕生から早や二年半が経過しているが、知事の人気はまったく衰えをみせていない。二〇一〇年二月前後に実施された新聞各社の世論調査でも軒並み八割前後の支持率であった¹⁾。これは東京の石原都知事がもっとも支持されていた時期の支持率に肩をならべるものである²⁾。橋下府知事は就任以前のタレントとしての活動に加え、就任後の大胆な政策提言や過激ともいえる数々の発言などから、大阪のみならず全国的にも注目を集めている。そして、その言動や政治手法からしばしばポピュリストと称される³⁾。

「ポピュリズム」「ポピュリスト」といった用語は、小泉政権の誕生以降マスメディアで盛んに使われるようになり、人口にも膾炙した。しかし、その用いられ方はほとんどの場合曖昧かつ恣意的である。おおよそ、「大衆動員、大衆の支持調達に懸念をもつて、ファシズムに近い意味で用いられることも少なくない」が、「扇情的スローガンによる積極的動員ではなく、大衆の意見に同調した機会主義、ご都合主義、大衆迎合主義という批判的含意をもつて使われることも少なくない」といったところだろうか⁴⁾。

ポピュリズムはほぼ例外なく批判の意味で用いられるが、右のような用法は批判として妥当であろうか。「民主

選挙である以上、人気とりを計算して演出するのは悪いことではないはず⁵⁾との意見を完全に否定することは、それほど容易ではない。ほとんどの政党・政治家は、程度の差はあれ有権者の支持を得ることを計算しつつ政治活動を行っているのではないだろうか。

では、研究者はボピュリズムをどのようなものとみなしているのか。実際のところ世界中にボピュリズムと称されるような現象があり、それぞれの特徴は大きく異なるため研究者の間でも合意をみていない。それでも、よく指摘される要素を列挙するならば、以下のようになる⁶⁾。

反エリート…既存の政治体制・官僚組織・政党・議会などに対し、既得権益にしがみつき墮落していると批判する

ふつつであること…反エリートの裏返しとして「世間の常識」「普通の人びと」を重視し、みずからがその立場にあることを強調する

善悪二元論…「エリート」と「普通の人びと」、「敵」と「味方」といった単純な見方を強調し、「敵」に対するヒーローの役割を演ずる

リーダーシップ…利害調整よりむしろ強いリーダーシップを誇示し、トップダウン的な手法を多用する
直接性…中間的な組織に依存することなく、マスメ

ディアなどを介して直接的に人びとの支持を獲得するこれらの要素は、一つひとつをとれば該当する政治家や運動体は少なくない。ただ、それらのほとんどを兼ね備え、かつ明確に志向しているとみなせる対象はさほど多くない。その点、橋下府知事はこれらすべての要素を申し分なく兼ね備えているように見受けられる。その意味で、価値判断を控えたとしても彼を「真正」のボピュリストとみなすことには躊躇を要しない。

橋下府知事がボピュリストであるとして、つぎに検討しなければならないのは、有権者の意識である。すなわち、大阪府民は彼の何を評価し、なぜ支持しているのかという問題である。第一に、ある政治家がボピュリストの要件を満たしているとしても、とりたてて有権者の支持を得ていないのであればボピュリストとして議論の俎上にはのほらない。第二に、その支持理由が政治理念や政策への共鳴だとするならば、扇情的な大衆動員というよくある批判は当たらない。裏を返せば、本来なら人びとがこそって支持するとは思えないような理念や政策を掲げているにもかかわらず、なぜか党派を超えた幅広い支持を得ているといった事態が、「ボピュリズム」というまなざしを生んでいるのではないか。だとすれば、府民が何を評価し、なぜ支持しているのかという点について実際のデータに即した分析

が必要であろう。そうした観点から、本稿では筆者らが二〇〇九年に実施した有権者意識調査のデータをもとに、橋下府知事の支持構造を分析することにした。

二 橋下府知事に対する圧倒的な支持

まず、橋下府知事に対する支持の広がりを確認する。橋下府知事を支持するかという質問に対する回答の分布を年齢別に示したのが、図1である。

図1からは二〇〇九年時点での橋下府知事の支持率がきわめて高いものであることがわかる。全体では、「支持する」が四七％であり、「ある程度支持する」を合わせると九割に達する。年齢別にみても各年代とも支持率は高く、六五歳以上でやや「支持しない」という回答が多くなっている。ちなみに同時期に行った東京調査では、石原都知事の支持率は五七％であった。つぎに、橋下府知事の支持率を支持政党別にしたのが、図2である。橋下府知事は民主党・自民党という二大政党の支持層にもっとも強

図1 橋下府知事の支持率（年齢別）

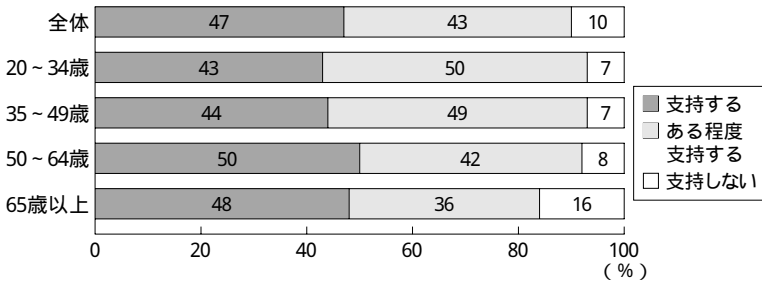
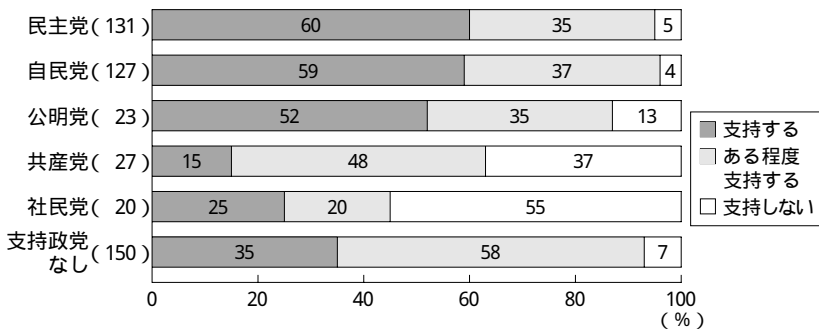


図2 橋下府知事の支持率（支持政党別）



(注) 政党名のあとの()は回答者数。

く支持されている。「支持する」がともに六割前後で、「支持しない」という回答は数%でしかない。公明党支持層がそれに続き、支持なし層は「ある程度支持する」という回答が多い。また、共産党・社民党支持層は他に比べると橋下府知事の支持率は低いものの、それでも共産党支持層で六三%、社民党支持層で四五%が「支持する」「ある程度支持する」と回答している。このように、橋下府知事は党派を超えた幅広い支持を得ているのである。

三 橋下支持と政治的価値観の関係

では、支持政党別にみて共産党・社民党支持層の支持率が相対的に低いのはなぜか。その答えは比較的容易である。橋下府知事のほか、石原都知事・小泉元首相など日本のポピュリズムは、政治的価値観においては一九八〇年代のレーガンやサッチャーに代表される新保守型ポピュリズムとよく似た特徴をもつ。新保守型は既得権益の打破を掲げ新自由主義的な政策を推進するとともに、伝統的な価値観やナショナリズムを強調する。前者は都市部の若者や経済的に安定した人びとの共感を得やすく、後者は高齢層を中心とする保守層の共感を得やすい。このように立場の異なる人びとが、別々の側面に共鳴することで結果として幅

政策研究・情報誌 地域政策

2010・秋季号(No.37) 2010年9月下旬発行 定価650円(本体619円)

特集 地域主権の行方

三重県知事 野呂昭彦 / NPO法人地方自立政策研究所理事長 穂坂邦夫
読売新聞社編集委員 青山彰久 / 高知県知事 尾崎正直

インタビュー 明治大学農学部教授 小田切徳美

文化企画 フリージャーナリスト 北井 弘
遠野遺産認定調査委員長 杉田盛彦

ニュース/ルポ がんばる自治体

名護市(沖縄県) / 人吉市(熊本県) / 山形市(山形県)

三重発 対談「女性が拓く」

伊賀流忍者博物館職員 山口美紀、幸田知春、島 恵美梨

視点 (特活)NPO政策研究所専務理事 相川康子

企画・編集:

三重県政策部企画室

「地域政策 三重から」

(〒514 0004)三重県津市栄町1-891

TEL 059 224 2767 FAX 059 224 2594

発行所:

公人の友社

(〒112 0002)東京都文京区小石川

5-26-8

TEL 03 3811 5701 FAX 03 3811 5795

表1 政治的価値観と橋下府知事の支持率

新自由主義	ナショナリズム		支持する	ある程度支持する	支持しない
x	x	>	35%	44%	21%
	x	>	41%	51%	8%
x		>	53%	38%	9%
		>	56%	40%	4%

広い支持の獲得が可能となる。この点、共産党や社民党を支持する人びとは新自由主義にも伝統主義・ナショナリズムにも否定的であり、橋下府知事とは政治的価値観において相容れない。

橋下府知事が新保守型であるのは、実際のデータからも明らかである。調査の回答から新自由主義に肯定的か否定的か、ナショナリズムに肯定的か否定的かといった基準で分類を行い、支持率との関係をみたのが表1である。

表1からわかるように、ナショナリズムと新自由主義の少なくともどちらか一方に肯定的である人びとにおいて、橋下府知事の支持率は九割を超える。他方、ナショナリズムにも新自由主義にも否定的な人びとで

は、二割以上が「支持しない」と回答している。また、ナショナリズムに肯定的な人びとでは、「支持する」の割合だけで半数を超える。逆にいえば、ナショナリズムに否定的な人びとでは、「ある程度支持する」という弱い支持がむしろ多い。

このように、政治的価値観は橋下府知事を支持するかどうかの判断に一定程度の影響をおよぼしている。とりわけナショナリズムが個別の政策と直接的な関連性が低いにもかかわらず強く影響している点は、注目に値する。日本においてナショナリズムは戦後一貫して左右対立の中心基軸であったが、いまなお政治家に対する評価軸として機能しているのである。

これまでの説明からすると、新保守型ポピュリズムは幅広い社会層から支持を得られるため安定的とみえるかもしれない。しかし、それは実際には微妙なバランスの上に成り立つものである。小泉「改革」の帰結からわかるように、新自由主義的な政策は雇用や社会保障の不安をもたらすとして世論の反発をうけやすい。一方で、復古的・排外的なナショナリズムの強調は若者を中心とする無党派層にはあまり受け入れられない。たしかにナショナリズムや新自由主義は支持の調達に効果的であるが、それが適度なバランスを失うと、とたんに支持率の低下を招きかねないのであ

る。

四 橋下府知事を支持する理由

橋下府知事に対する支持の背景として政治的価値観を取り上げたが、そのみでは高い支持率を十分に説明できない。ナショナリズムにも新自由主義にも否定的な人びとですら八割程度が橋下府知事を支持しているという事実を考慮するならば、こうした価値観以外の要因によって彼を支持する人びとがかなりの程度存在するのではないかとの推測が成り立つ。では、さきにポピュリズムの特徴として言及した諸要素が支持の理由に関係しているのだろうか。この点についても調査データからみていこう。

調査では、知事を支持すると回答した場合、その理由を尋ねている。「何かやってくれそうな期待感」「わかりやすい語り口、本音の発言」「リーダーシップ、実行力」「さまざまな組織・団体との対決姿勢」「政治的な理念・思想」「具体的な政策」という六つの選択肢から二つ以内で選んでもらったところ、図3のような結果となった。

結果をみると、橋下府知事の理念や政策を支持理由として挙げたのはそれぞれ一割程度に過ぎない。つまり、その「中身」が直接支持に結びついているわけではないのであ

る。むしろ、語り口

や発言、リーダーシップ、対決姿勢というような手法もしくは形式を支持理由として挙げる人びとが圧倒的に多い。いうまでもなく、この三つの選択肢はさきのポピュリズムの特徴との対応を意図したものである。もちろん、支持する理由におけるこのような傾向は石原都知事の場合も同様であり、他の政治家も大して変わらないのかも

れない。他と比較してどうかという点は留保するにせよ、橋下府知事に対する支持理由はポピュリズムの特徴を色濃く反映しているといえよう。では、支持理由ごとの回答者の特徴とはどのようなもの

図3 橋下府知事を支持する理由

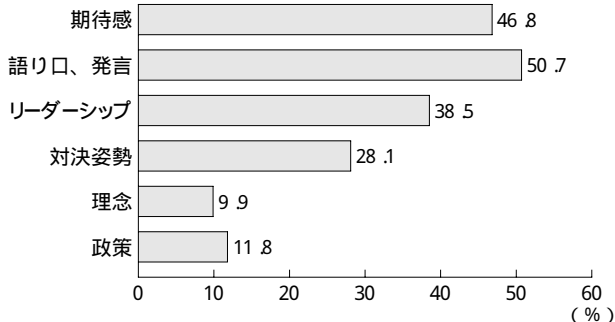


表2 支持理由別の回答者の特徴

支持理由	回答者の特徴
期待感	今の政治に対する不信感が強い
語り口、発言	女性、周囲の意見に流されない性格
リーダーシップ	若者
対決姿勢	日本社会の行く末に悲観的、かつしやすい性格
理念	男性
政策	自分は他の人に比べ上位の階層に属していると考えている

であるうか。それがわかれば、橋下府知事の支持の背景をより理解しやすいものではないか。そうした観点から、さまざまな質問項目の関連構造の分析を行い、表2の結果を得た。¹¹⁾

表2からわかるように、それぞれの支持理由は人びとの社会的属性や性格などと関連している。「期待感」を支持理由として挙げたのは、端的に政治不信が強い人びとである。「わかりやすい語り口、本音の発言」を理由とするのは、女性や周囲の意見に流されない性格の人に多い。「リーダーシップ」を理由としたのは若者に多く、「対

決姿勢」を挙げた人は社会の行く末に悲観的であったりかつしやすい性格であったりする。また、「理念」は男性に多く、「政策」は階層的地位が高いと考えている人に多い。

この関連の多様性は多くのことを示唆する。まず、党派や政治的価値観によらない「期待感」による支持は一九八〇年代以降の日本政治に顕著な特徴である。土井たか子・細川護熙・青島幸男と横山ノック、そして小泉ブームおよび二〇〇九年の政権交代など事例には事欠かない。しかし、それらはいずれもほどなくして有権者の失望を招く結果となった。「期待と幻滅のサイクル」¹²⁾がいまなお持続的に回り続けているようにもみえる。筆者は以前石原都知事の支持率低下の原因を分析したことがあるが、支持をやめた人びとの特徴としてやはり政治不信の強さがあつた。¹³⁾つまり、政治不信の強い人びとは新しく表舞台にあらわれた政治家に期待を寄せがちだが、失望して不支持に転じるのもまた早いのである。橋下府知事がこのサイクルに巻き込まれるかどうかはいまのところ不明であるが、知事はそれを回避すべく精力的な活動を行っているようにもみえる。

ポピュリズムに関連する支持理由のうち、若者が「リーダーシップ」を理由に挙げる、逆にいえば年齢の高い人びとがそれを支持理由として挙げないのは、橋下府知事自身

の年齢が影響していると推測される。注目すべきは、それ以外の「語り口、発言」「対決姿勢」が性格や主観的な意見と関連していることである。具体的には、非同調的な性格の人は知事の本音の発言に惹かれ、悲観的もしくは感情的な性格の人は知事の対決姿勢に惹かれていく。すなわち、知事を支持する背景の一つとして感情的自己同一化の兆候が見受けられるのである。もちろん、ここで取り上げた支持と性格との関連は統計的にはそれほど強いものではない。とはいえ、政治的価値観とは別に、いわば「扇情的」要因が知事と有権者とを部分的に結びつけていることがデータからも確認できたといえよう。

このように、橋下府知事支持の背景には、政治的価値観に基づくもの、既存の政治に対する不信感ゆえの漠然とした期待に基づくもの、そしてポピュリズムの特徴ともいえる感情的な共振といった多様な側面があることが明らかとなった。

五 橋下府政の何が評価されているのか

最後に、橋下府政の何が評価されているのか、簡単にみておきたい。図4は橋下府政の「経済・財政」「地方自治」「教育」「福祉」について、どの程度評価しているかという

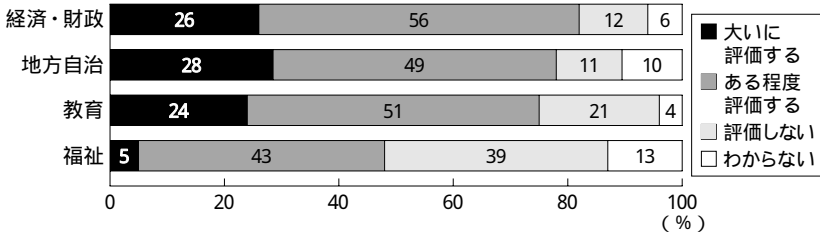
『市政研究』最近号

第168(夏季)号 2010年7月

特集 大阪発・市民活動の現在

市民活動の現在2010	早瀬 昇
コミュニティ・シンクタンクの行方	直田 春夫
改めてNPOの存在意義を考える	今瀬 政司
新しい協働の受け皿づくりをめざす在日コリアン運動の試み	金光 敏
新たな市民社会は形成されたか	岡本 仁宏
「大阪都構想」を批判する	本郷 隆夫

図4 橋下府政の政策評価



質問への回答を示したものである。

図4をみると、経済・財政、地方自治、教育という三分野はその評価の分布が似通っている。「大いに評価する」が二割台で、半数程度が「ある程度評価する」と回答している。ただ、教育に関しては若干「評価しない」という回答が多い。また、福祉に関しては「評価する」が半数以下にとどまっており、「評価しない」が四割近くとなっている。この結果は、橋下府政の現状からみて理解可能なものである。すなわち、とくに力を入れている分野は評価され、そうでない分野は評価が低い。

ちなみに、さきの支持理由において「理念」「政策」を

挙げた人のほうが「大いに評価する」という回答が多く、それらを理由として挙げなかった人は「ある程度評価する」という回答が多い。このことから、個々の政策評価よりむしろ、知事の政治手法や言動そのものがその支持に大きな影響をおよぼしていることが示唆されよう。加えて興味深いのは、支持理由に「期待感」を挙げた人びとはとりわけ個々の政策に対して積極的な評価を示さないという点である。彼らはいったい何を「期待」しているのだろうか。

六 橋下府政の行方

本稿では、橋下府知事の支持構造をポピュリズムという観点から実証的に検討した。橋下府知事はその評価はさておき、政治学的な研究の蓄積からみてポピュリストと位置づけられる。では、府民は何を評価し、なぜ支持しているのかというのが、本稿の分析課題であった。

第一に、橋下府知事の支持率は非常に高く、自民党・民主党そして支持なし層といった党派を超えた人びとから幅広い支持を得ていることがわかった。政治的価値観からみると、新自由主義とナシヨナリズムが知事を支持するかどうかに影響しており、そのどちらに対しても否定的である

人びとは相対的には知事を支持しない傾向があることも明らかとなった。

第二に、支持理由において政治的な理念や政策よりむしろ、漠然とした期待感やリーダーシップ、その言動など形式・手法による支持が多いことがわかった。そのうち期待感による支持の背景には政治不信があり、それはここ二〇年以上の日本政治における特徴のひとつであることを指摘した。また、知事の言動や手法を支持する人びとには感情的な共振がみられることも示された。

第三に、政策評価においては福祉以外の経済・財政、地方自治、教育といった分野は高く評価されていることがわかった。ただ、知事に対する期待感、もしくは政治手法や言動によって支持をしていると回答した人びとは、個々の政策に対してそれほど積極的に評価をしているわけではないことも確認された。

では、今回の分析から今後の橋下府政に対してどのような示唆が得られるだろうか。第一に、支持理由で大きな割合を占める期待感は長期化によって必然的に低下する。これは小泉政権や石原都政など先例からみて明らかである。そうした状況にあつて、知事が政策や理念による支持を求めていくのか、それとも政治手法や言動の斬新さによってアピールし続けるのか、注視していく必要がある。

第二に、既成政党との関係である。現在のところ、既成政党との距離が知事に対する支持にプラスに作用している。しかし、既成政党・議会との亀裂があまりにも大きくなりすぎ、結果的に支持を失っていった田中康夫元長野県知事のような例もある。とりわけ橋下府知事を強く支持しているのは支持なし層よりむしろ自民党・民主党支持層であるだけに、政党との関係がどうなっていくのか、それに各党支持層がどのような反応を示すのか、といった点が注目される。

第三に、政策評価と支持の高さは必ずしも一致しない。今回の調査において支持率は九割を超えているが、個々の政策を積極的に評価しているのは四分の一程度に過ぎない。したがって、橋下府政の政策的な方向性が徐々に明確になっていくことによって、支持が強まる可能性もあるが、その逆となる可能性も排除できない。こうした点については、再度有権者意識調査を実施し、その変化をあらためて検討したい。

いずれにせよ、政治のポピュリズム化は一過性のものではなく、今後の日本政治において繰り返し生起するものと考えたほうがよい。ポピュリズムは既成政治の応答性の低下と有権者意識の変化を背景としており、病理的な現象として一方的に批判してすむほど単純なものではない。いま

私たちに必要とされているのは、現代のポピュリズムがどのような展開をたどるのかを客観的に分析することであり、そのうえで、既成政治でもなくポピュリズム政治でもない、「あるべき政治」を模索し続けることなのである。

(注)

- (1) 「読売新聞」二〇一〇年一月二六日、「産経新聞」二〇一〇年二月二日、「朝日新聞」二〇一〇年二月二日。
- (2) 「朝日新聞」二〇〇七年二月七日。
- (3) 石田英敬「笑う タレント知事とポピュリズム」、『論座』一六〇号、二〇〇八年。
- (4) 大嶽秀夫『日本型ポピュリズム』中央公論新社、二〇〇三年、一一〇頁。
- (5) 田所永世『中間報告 橋下府知事の三六五日』コマックス、二〇〇九年、三一頁。
- (6) ここでの整理には以下をおもに参照した。前掲書(4)、『レヴァイアサン』四二号(特集 ポピュリズムの比較研究に向けて)、二〇〇八年、島田幸典・木村幹編『ポピュリズム・民主主義・政治指導 制度的変動期の比較政治学』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、Canovan, M., "Trust the People! Populism and the Two Faces of Democracy", *Political Studies*, 47(1), 1999, Taggart, P.A., *Populism*,

Open University Press, 2000., Weyland, K., "Clarifying a Contested Concept: Populism in the Study of Latin American Politics", *Comparative Politics*, 34(1), 2001.

- (7) 有権者意識調査は、二〇〇九年衆議院選挙後の二〇一二月に実施した。東京都・大阪府各六区市を対象とし、大阪では無作為抽出により生野区・東住吉区・豊中市・高槻市・枚方市・岸和田市を対象区市とした。標準抽出には選挙人名簿を用い、二〇〇七九歳の有権者を各市区二五〇サンプル、計三〇〇〇サンプル抽出した。郵送法による調査の結果、全体の有効回収数は九七七、有効回収率は(不達等を除くと)三三・四%であった。うち本稿でももに用いる大阪府域の有効回収数は四九〇である。なお、この調査は田辺俊介氏(東京大学)・米田幸弘氏(和光大学)・永吉希久子氏(大阪大学)らの協力を得て実施したものであり、かつ科学研究費補助金の助成を受けている。
- (8) 新自由主義については、「所得格差の拡大」「自己責任」「競争主義」の是非を問う質問、ナショナルリズムについては、「国旗・国歌」「愛国心教育」「日本人としての誇り」についての質問への回答をもとに、回答者を二つのグループに分類した。
- (9) 「語り口や発言」は、ふつうであることを直接性、「決姿勢」は反エリートや善悪二元論との関連を想定している。

- (10) 加えて、選択肢の順番が影響している可能性も排除できない。今回の調査では、選択肢の最初に「期待感」が最後に「政策」が位置しており、後ろのほうの選択肢ほど選ばれにくかったという可能性もある。また、どついつた選択肢がふくまれているかによって、支持理由の分布は大きく変わってくるので注意を要する。
- (11) 分析の詳細は省略するが、基本的には諸変数間の相関係数の大きさを判断基準とした。
- (12) 前掲書⁴⁾。
- (13) 松谷満「ポピュリズムとしての石原都政 なぜ都民は支持したのか」東京自治研究センター編『石原都政一〇年の検証 東京白書 3』生活社、二〇〇九年。